

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六（公衆）〇四七二二七二〇七

沖繩国体に名をかりた「天皇」 「日の丸・君が代」の押しつけを許すな

5・15沖繩平和行進に参加

5・15沖繩平和行進は、五月八日に本土代表、沖縄県労協傘下の労働組合の仲間達、三〇〇名余りが結集し、行進団結団式が行われ、それぞれA・B・Cの三コースに分かれ、翌日九日から行進が始まった。動労千葉は、Bコースとなり、沖縄本島の北部の中心街、名護市から那覇市まで七日間、一三五Kmの道のりを行進した。

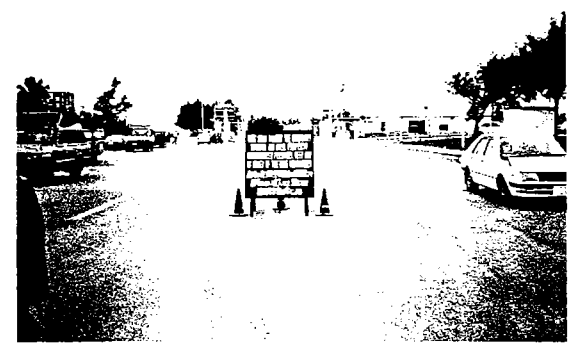
平和行進団への激励に感激

Bコースの行進団は、全駐労の仲村渠（なかんだかり）団長を先頭に、沖縄の全電通・全通、本土代表として、自治労神奈川・大阪交通青年部・大阪交通労組・滋賀・茨城の代表、全電通・全通、そして動労千葉が加わり約五〇名が七日間を通して歩き、地元の労組も各日行進団に加わり、多い時は四二五〇〇名の隊列にふくれた。

まず感じたことは、行進団に対する沖縄の人達の声援が多かったことだ。行進団が通る沿道では、門まで出てきて手を振るおじいさん、おばあさん、すれ違う車はクラクションを鳴らし、ドライバーが手を振る。とても東京や千葉では考えられないことだ。それだけ沖縄の人達に反戦の意識が根づいていると感じた。また、戦争で、政治で、すべて本土の犠牲にされた沖縄の人々の本土のわれわれに対する糾弾にも思えた。

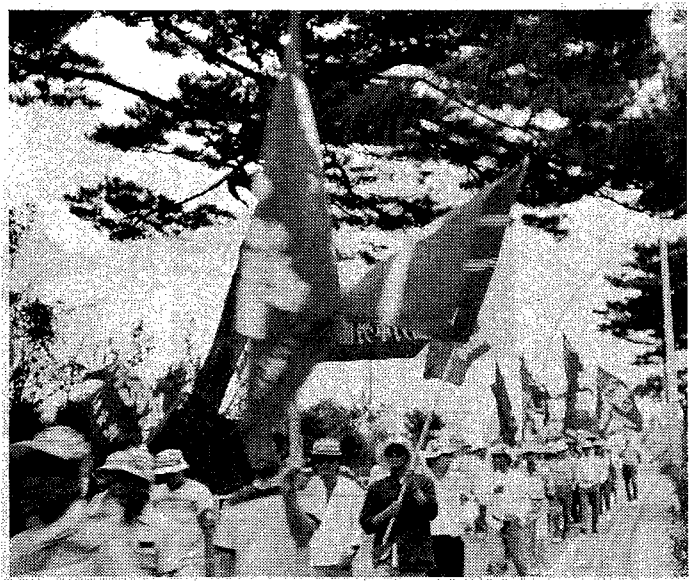
沖縄の労働者と交流

Bコースは、名護から出発。初日は、本部（もとぶ）半島をぐるつとまわり、二日目は、また名護市へと戻り、三日目は宜野座（ぎのざ）村へと向かう。四日目には県道五八号線を封鎖して実弾演習が行われている金武（きんぶ）町へと入る。着弾地点の山は、山肌があらわになり、実弾演習のすさまじさを物語っている。



嘉手納基地第二ゲート前の様子。

また、この日は、米軍の中でもエリートと言われる侵略最前線部隊II海兵隊の駐留するキャンプハンセン前で抗議も行った。五日目からは、さすがに足に疲れがたまってくる。左足に豆が三つ。針でつついて水をだしても一日歩くとまた水がたまり、豆が大きくなっている。しかし夕方近くにたたかう基地労働者が多くいる具志川（ぐしか



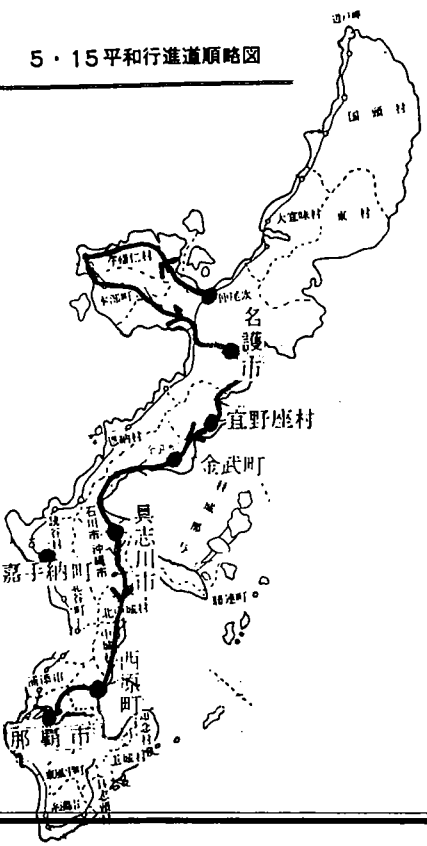
第一日目。名護市仲尾次を出発した平和行進団。

わん市に入り、全駐労の仲間をはじめとした中部地区実行委員会の盛大な歓迎で疲れも吹きとんだ。その後、米軍のあまりの強権支配に住民の怒りが爆発したコザ暴動で有名なコザ十字路を通って宿へ向かう。

平和行進を貫徹

六日目、十四日は、宿の中頭（なかがみ）教育会館を後にして、嘉手納基地第二ゲートへと向かう。さらに西原町へと進み、西原町内を辻説法のようにグルグルまわる。

裏へぶくろ



5・15平和行進道順略図

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！

この日の夜、最後の交流会では、持参した第一波・二波ストライキの写真集を行進団に参加した沖縄・本土の参加者に販売した。ものの十五分で四〇冊近くが売れてしまのおどろいた。

そして最終日、西原町から那覇へ。夕方には、那覇中央公園で開催された5・15平和と暮しを守る県民大会へと合流。万雷の拍手で迎えられ、「やり抜いた」と感激がわいてきた。動労千葉の平和行進への参加は、かなりの反響をよんだ。改めて動労千葉のたたかいが全国に鳴り響いていることを実感した。



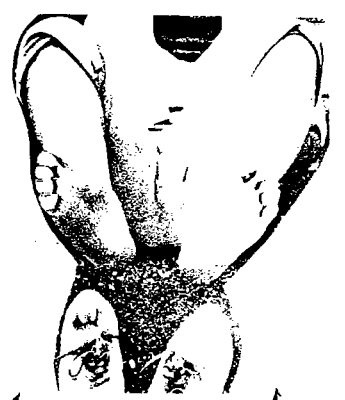
▲嘉手納基地ゲート前で米軍にシュプレヒコールを叩きつける平和行進団。

天皇沖縄訪問反対！

また、今年の十月に開催される国体に名をかりて、戦後一度も沖縄に足を踏み入れることのできなかつた天皇が沖縄を訪問しようとしている。「沖縄の戦後を総決算する」として中曽根は七月から機動隊七五〇〇名を本土から送りこみ、暴力的に天皇訪沖を強行しようとしている。まさに歴史を画する攻撃だ。

動労千葉は、こうした中曽根の戦争政治を打ち破るために国鉄―三里塚決戦勝利、本土―沖縄を貫きたたたかいをかちとり、強制配転攻撃粉碎、動労革マル―鉄道労連解体のたたかいを断固たたか

連日20Kmの行進で足の裏は「マメ」だらけ。しかし、この沖縄の経験を生かして、国鉄―三里塚―沖縄を貫きたたたかいで日帝・中曽根の戦争政治を打ち破るぞ！



▲平和行進最終日。那覇中央公園で行われる県民大会に合流。

▼第二次大戦の戦没者を供養するために建てられた「西原の塔」の前で反戦・平和を誓う。

